



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	社会的包摂としてのインフォーマル教育ー生き直しの学校を事例としてー
Author(s)	北澤, 泰子
Citation	研究論集, 11, 267(左)-284(左)
Issue Date	2011-12-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/47883
Type	departmental bulletin paper
File Information	15_RONSHU_11_KITAZAWA.pdf



社会的包摂としてのインフォーマル教育

— 生き直しの学校を事例として —

北 澤 泰 子

要 旨

本稿ではタイのスラムをはじめとした劣悪な環境で、麻薬密売、犯罪、物乞い、物売り、児童虐待といった社会的排除に遭った子どもたちを、NGO がインフォーマル教育を通して包摂する取り組みについて述べている。タイのバンコクのスラムを拠点として活動する、「ドゥアン・プラティープ財団」が運営する児童養護施設、「生き直しの学校 カンチャナブリー校」を事例に考察する。

タイのスラムは 1950～1960 年代の急激な工業化、近代化政策の歪みによって生まれ、現在に至るまで居住問題、雇用問題、家庭問題、治安の悪化等、解決されない多くの問題を抱えている。本来このような問題の被害者である子どもたちは、公的社会福祉によって保護されるべきであるが、現状は十分なケアは行われていない。これらを補完するように、ときに行政と協働しながら包摂しているのが NGO である。

「生き直しの学校」では小学生から高校生までの子どもたちが共同生活を行い、平日は公立の学校に通学している。職員 11 名を対象に行ったアンケート調査からは、予算の不足、子どもを見て育てる専門家（カウンセラー・医師・社会福祉士）の不足が課題として挙げられた。予算の不足は財団の活動が多岐にわたり、その上不況で寄付が減少したためと考えられる。またカウンセラー等の専門家は、幼少期悲惨な体験をしている子どもが多く、心理的な治療や教職員の研修等が必要であり、子どもの語りを聞く専門家が求められているためと考えられる。

子どもたちはこの学校に入学して、家庭的な雰囲気の中で規律のある生活を行いながら更生し、心身共に健康になっていく。長期的に子どもたちの成長を見守ることのできるこのようなインフォーマル教育を行う施設は、これからの社会的包摂としての役割を担っていくことを期待される。また卒業後も自立した生活ができるように、子どもたちの「家」として継続的に支援していくことが必要である。

1. はじめに

タイでは経済発展の結果、さまざまな社会問題が顕在化している。その一つが都市部への人口流入に伴う、スラム化である。バンコクにあるクロントーイ・スラムは、スラムとしてすでに50年以上の歴史があり、先進国並みの発展をする首都の中に取り残される形で存在し続けている。スラムは「悪の巣窟」と呼ぶタイ人がいるように、麻薬、犯罪、HIV/AIDS、児童虐待、ストリート・チルドレン等、子どもが安心して生活できる環境ではない。警察も取り締まりをしているが、スラムの中は迷路のように入り組んでおり、路地裏に入ってしまうと追いかけることは難しい。麻薬の受け渡しには子どもが仲介役として使われ、小遣い稼ぎの感覚で、犯罪に関与していることもある。政府のスラム政策も1950年代から行われてはいるが、スラムに根付いて活動する国内外のNGOの存在は大きいといえる。NGOの活動は、国の発展から取り残され社会的排除を受けている人々を、社会に包摂する役割を担っている。

本稿ではスラムで活動するドゥアン・プラティーブ財団が、麻薬や犯罪に関わったり、児童虐待に遭った子どもたちが自然の中で更生するために始めた「生き直しの学校」の取り組みについて取り上げる。「生き直しの学校」では小学生から高校生の子どもたちと財団のスタッフが共同生活を送っている。この取り組みをインフォーマル教育として位置づけし、社会的包摂としてタイ社会でどのような役割を担っているかを検討していきたいと考えている。

2. 先行研究

2.1 タイのスラム問題

タイのスラムは1950年～1960年の急激な国の工業化、近代化政策の歪みによって生まれたと認識されている。首都バンコクの急激な発展は農村との経済格差を広げ、伝統的な農村の自給自足の経済構造を破壊し、農村は完全に商品経済の中に組み込まれていった。その影響で農村では生活できなくなった農民は、現金収入を求めてバンコクに流入していった。都市も発展のために安い労働力を必要としていた。

しかし、バンコクの人口が爆発的に増加しても、住宅計画や雇用制度は整っていないために、農村から出てきた貧しい農民の移入労働者に対しては、何の対策もなく、空地にバラックを立て、スラムを形成することになった。現在タイ国内には2,000箇所以上のスラムがあると言われており、その多くがバンコクとその周辺に集中している。バンコクだけでも1800箇所のスラムが存在し、バンコク人口の20%がスラムに住んでいると言われる。

1960年以降から今日までスラムでは、タイ住宅公社(NHA)による「サイト・アンド・サービス事業」や「土地分業事業(land sharing)」などの居住環境改善政策がとられている。スラムは土地を不法に占拠する形で作られているため、住民の立ち退き問題は現在も続いている。

1980年代後半には政策形成に NGO や住民組織が参加する仕組みが作られ、90年代には徐々に作られていた住民ネットワーク組織が強化され、行政や NGO が担っていた居住環境改善事業の一部をスラム住民が実施できる体制が整備された。

現在のバンコクのスラムは NGO や住民組織の努力により整備されたように見えるが、雇用問題(インフォーマルセクターで働く人々が多い)、麻薬、HIV/AIDS の感染、青少年の喫煙や飲酒、教育の向上等かかえる問題は多い(秦, 2005)。

バンコクのスラムは一見、整備されているようにも見えるが、常に立ち退き問題がつきまといっている。また内部は迷路のように入り組んでおり、案内人なしでは立ち入ることは難しい。バンコクの都市下層民のリスク対応について書いている遠藤環によると、スラム内コミュニティの家族構成の現状を見ると、核家族が半数を占めているが、直系家族・複合家族の割合がバンコクの平均と比べて高い結果になっている。内訳をみると甥・姪や兄弟姉妹が同居する世帯が多い、同居形態に関わらず、離婚・別離経験者が多い、就学中や失業中の甥姪や兄弟姉妹を扶養しているとなっている(遠藤, 2011)。婚姻関係、扶養関係の流動性ゆえに、各世帯は常に新しい構成員が流入、もしくは流出する可能性を抱えている。その中で一番弱い立場にあるのが、子どもである。自分の意思では決められず、常に大人たちの分裂・統合といった変化に伴い流動する危険性をもっている。実の親が服役中であつたり、実子をおいて国外で再婚をしているケース、何らかの事情で実子を扶養できない、送金もないというようなケースを残された家族や親戚たちが引き取って育てているという現状がある。

2.2 タイ社会における社会的排除と包摂

スラムの現状は住居問題、雇用問題、家庭問題と、常に解決の難しい問題を抱えている。しかしその中でも、子ども世代には奨学金で高校や大学まで通わせたいという思いがあつたり、スラムで多発する火災で家を消失しても、またやり直そうと努力する者もいる。本来なら公的社会福祉によって救済されるべきであろう人々も、十分な支援が行われていない。そしてその不満を訴える術も持ち合わせていないため、タイ社会から取り残されるかたちになっている。その中でも大人の都合によって、物乞いや物売りとして働かせられたり、児童買春、麻薬密売に関わる子どもは一番の被害者だろう。このような社会的排除の現状と、包摂のしくみについて考察する。

まず社会的排除の特徴について、岩田正美の定義によると、①参加の欠如 社会関係が危うくなつたり、ときには関係から切断されていること。(⇒関係の欠如)職場でのパワーの欠落に対抗する労働組合などへの参加ができる場合は、参加の欠如にはならない。②複合的な不利 今日の社会問題は社会階級や特定集団の共通利害を典型的に示す問題ではなく、「原子化、個別化」している。社会的排除は旧来型の福祉国家が対応できない、個別の人生軌跡の中に生ずる諸問題の総称となっている(岩田, 2008)。

貧困は資源の不足であるが、社会的排除は社会関係の不十分であるという区分がされている。先進国での事例研究が行われているが、途上国の社会においてもこの概念を用いて考察していきたいと考えている。

次にタイにおける社会的排除の特徴について、櫻井義秀と道信良子は次のように説明している。従来であれば、貧困問題や少数民族の問題・外国人労働者の市民権問題がそのまま社会的排除の実例になるのだが、タイではたびたび起こるクーデターが示すように、社会的排除を受けているのが多数派であるという実情がある。民主政治の選挙で選ばれたタクシンだったが、クーデターによって失脚したため、いくら国民が市民権を持っていたとしても、政府に国民の声を届けるのは難しい。タイの社会的排除の構造は、非常時には政治から阻害される大多数の国民がいること、平時には貧困他、グローバル化する資本主義経済発展により、新たに生み出される社会的排除が二重に存在している（櫻井・道信、2010）。

社会的包摂の施策として、まずは国家レベルでの取り組みについて考えたい。2000年以降のタイでは、タクシン政権が新自由主義的経済政策を推進し、地域・階層間格差はますます増大してきている。タクシン政権は貧困撲滅を公約の一つに挙げていた。保健医療分野では30パーツ医療サービス制度、コミュニティの経済支援では、一村一品事業や村落基金が開始された。また低所得者用住宅の供給、薬物一掃プロジェクト、自己申告制による貧困者登録制度も実施され、登録者のニーズの把握も進められた。コミュニティに直接資金を注入する方法は、ばらまき政策であるとの批判もあり、政策の効果に疑問が残るところである。また福祉政策も人気取りと軽く扱われ、社会政策に国税を用いることの社会的正当性が国民の間に十分に浸透しなかったという側面もある。

次にNGOの取り組みでは、行政と協働して問題を解決する事例もある。ストリート・チルドレンに対するNGO・地域行政のサポートについて研究したジュタティップ・スチャリクルによると、行政はストリート・チルドレンの必要な証明書（身分証明書、住民票など）の作成、行政・NGOの施設への入居、NGOへの予算支援でのサポートを行い、NGOはストリート・チルドレンの日常に深く関わり、関係をより強いものにすることで彼らを包摂するということが見られた。

またドゥアン・プラティープ財団の創設者であるプラティープ・ウンソンタム・秦は次のように語っている。タイでは貧富の格差を生みだす社会の構造的な問題と同時に、子どものころから今日の生活のすべてを運命や仏教という輪廻としてあきらめ、声なき民として沈黙し、現実を受け入れるという文化の中で育てられているという側面がある。親から子へ。子から孫へと続く貧困の連鎖を止めるために、教育ができること考える。（プラティープ、1997）国民に大部分が信仰する上座部仏教は、厳格な戒律主義に基づいて継承されている。タンブン（功德を積む）、僧侶、先生、親といった年長者を敬う、仏教行事を大切にするといった仏教文化がタイの社会に定着し、安定をもたらしている部分もある。今置かれている状況を運命としてあきら

めるのではなく、国家、地域行政、NGO といったそれぞれのレベルで包摂していくことが必要であると感じている。

2.3 タイにおけるインフォーマル教育

タイで行われている教育の中で、「インフォーマル教育」は法律上の中で教育の一つの形態になっており、「関心、能力、レディネス、機会に応じて、学習者が個人、経験、社会、周辺環境、メディア、およびその他の学習源を活用し、自ら学習する教育をいう」と定義されている。この他に、年齢により学年化された教育制度に基づいて行われる「フォーマル教育」、フォーマル教育を受けていない子どもや成人を対象とした「ノンフォーマル教育」も教育の三形態の一つとされている。

タイは1937年には識字運動を全国レベルで展開し、この分野では世界の先駆者であった。また古くから仏教寺院が教育機関としての役割を担っていたことも大きい。2004年の教育省統計によると、初等教育、前期中等ともに100%に近い。ユネスコの推計によれば、2000年の識字率は95.5%である。教育機会のアクセスは高等教育になるにつれ不均等で、都市と農村の格差もある。

筆者の取り上げる「生き直しの学校」では、小学生から高校生までの子どもたちが共同生活を行いながら、平日は公立の小・中・高校に通学する生活を送っている。子どもたちは公立学校でフォーマル教育を受けているため、フォーマル教育の補完的な教育を行う「ノンフォーマル教育」とは異なり、JICA (2005) の定義する、「日常の経験や、家庭、職場、遊び、市場、図書館、マスメディアなどの環境から教育上影響を受けることによって、態度、価値、知識、技術が付随的に伝達される、生涯にわたる組織的ではない学習プロセス」としての「インフォーマル教育」と位置づける。子どもたちは家庭問題や本人の学習意欲が無い為に途中で退学する場合も多くあり、それが非行につながる要因にもなっている。義務教育は初等教育と前期中等教育合わせて9年間、無償で行われている。義務教育期間に中退し再入学する場合、学習の空白期間があるために、下の学年に入学することになる。また学費以外に制服、体操着、靴、靴、交通費、昼食代等の費用がかかることも、継続して教育を受けられない要因でもある。

NGO のインフォーマル教育の取り組みは、ドゥアン・プラティープ財団の他にも行っている団体はあるが、タイの中でもあまり例をみない取り組みである。またタイの NGO の Foundation for children (子ども財団) が運営する Moo Baan Dek (子どもの村学園) のように、親と一緒に暮らせない子どもたちを集めて、イギリス人の教育家 A. S ニールの自由教育を実践しながら共同生活を行う団体もある。Moo Baan Dek では小学校教育もこの学園内で行い、中学校からは近隣の公立学校へ通学するという形態をとっている。

3. 調査概要

3.1 ドゥアン・プラティーブ財団について

ドゥアン・プラティーブ財団は1980年にバンコクのクロントーイ・スラムに設立されたNGOである。創設者はプラティーブ・ウンソンタム・秦という女性で、1952年にクロントーイ・スラムで生まれ育ち、1968年に姉のミンボンと共に16歳でスラムに「一日一パーツ学校」を設立した。1970年代に入ると日本のNHKをはじめ、メディアでもこの取り組みが取り上げられるようになった。このような教育活動がきっかけとなり1978年に、フィリピンにてラモン・マグサイサイ賞(社会福祉部門)を受賞した。この時の報奨金20,000米ドルを投じて、ドゥアン・プラティーブ財団が設立された。

1992年、プラティーブと財団は総勢で民主化運動に力を入れ、民衆の関心を得るようになった。2000年にはそれまでの任命制から選挙制になった上院議員選挙に立候補し当選した。タックシン首相時代の2006年まで上院議員を務めた。

2010年3月から5月にかけておこった、タックシン元首相を支持する赤シャツ派集団(United front for Democracy against Dictatorship: UDD)のバンコク市街占拠闘争の際、プラティーブはクロントーイで集会を開き演説を行った。このことが原因で治安当局はプラティーブの個人資産を凍結し、非常事態令違反容疑で逮捕状が出た。そのため財団の理事長職を退任するという事態に発展した。その後政局の混乱による身の危険を感じるようになり、プラティーブは一時タイを離れ、夫と子どものいる日本に避難した。2011年1月にタイに帰国し、クロントーイでの財団の活動に復帰している。

現在、財団は教育推進事業、スラム地域開発事業、人材育成事業、緊急支援事業の4つの分野を軸に活動している。主な活動内容は下記の表1の通りである。

表1：ドゥアン・プラティーブ財団活動内容

1	教育推進事業	教育里親(奨学金)制度、芸術プロジェクト、難聴児教育おはなしキャラバン、ドゥアン・プラティーブ幼稚園
2	スラム地域開発事業	スラム地区の幼稚園支援プロジェクト、クロントイ信用組合、高齢者プロジェクト
3	人材育成事業	青少年育成プロジェクト、エイズ予防対策プロジェクト、「生き直しの学校」プロジェクト
4	緊急支援事業	クロントイ消防隊、津波プロジェクト

出典：財団リーフレット・ホームページより筆者作成

3.2 「生き直しの学校」について

ドゥアン・プラティーブ財団は1986年に麻薬常用、盗み等を犯した青少年の更生、家庭の崩壊によるストリート・チルドレンの保護を目的とした「生き直しの学校」(タイ語ではニワット

スーチーウィットマイ) を、タイ南部のチューンポーン県で運営を始めた。生き直しの学校チューンポーン校では子どもたちが社会的自立を目指し、3年間の月日を費やして心身ともに健康を回復、学業への復帰、農作業、コンピューター実習といった職業訓練等のプログラムを行っている。

チューンポーン校での取り組みが軌道に乗った後、1996年には少女たちのための学校をカンチャナブリー県に開設した。少女たちには性的虐待、家庭崩壊、家庭内暴力等の多くの問題が存在し、青少年と同様に薬物中毒になったケースもあった。現在は小学生から高校生まで、男子13名、女子18名、合計31名の生徒が共同生活をしている。(2010年12月は45名在籍) 校長はプラティープの姉のミンボン・ウンソントムが務める。男子は職業訓練のため、カンチャナブリー校からチューンポーン校へ転校することもある。

生き直しの学校は財団のプロジェクトの一つとして運営されている。予算の配分、職員の雇用、子どもたちの入学、進学等に関してはクロントーイの本部を通して行われている。



写真1：アブラヤシ農園にてプラティープ理事長（左）と
ミンボン校長

3.3 調査方法

2010年12月26日～29日まで、筆者は生き直しの学校カンチャナブリー校に訪問客として滞在し、職員11名に対してアンケート調査を行った。アンケートはタイ語で記入をしてもらい、帰国後同じ研究室に所属するタイ人留学生に翻訳をしてもらった。ミンボン校長、職員、子どもたちの話は財団日本人職員の中川氏に通訳をしていただいた。同じ期間に静岡県ボランティア協会主催の高校生スタディツアー一行が滞在していたことから、行動を共にした。また2009年8月と2011年8月にそれぞれ1泊ずつ滞在している。

4. 「生き直しの学校」での取り組み

4.1 学校目標

生き直しの学校には「4つのスローガン」と「6つの誓い」という2つ大きな学校目標がある。「4つのスローガン」は「1. お互いを信じることにより、共同生活を高めていく。」「2. 豊かな自然の中で、心の開発を行う。」「3. この学校に在る間は、自分で知識を高めていく。」「4. New Life のための仕事、試験を通るためにはどのようにしたらよいか考え、職業的専門性を身につけていく。」となっている。この目標の背景について、校長は次のように語っている。

色々な環境にいた子どもたちはどうしても、他人から信用されない。グループを作ってしまう。お互いを信じ合うこと、そのためにまず自分を信じること。自分を信じる事ができれば、周りの人を信じる事ができる。そのような気持ちが周りに伝わると、他の人に何をされても構わなくなり、最終的に自分の信頼感を高めることになる。

心がすさんでいく、人の心も読めない、自分の心も読めない状態。自分の思い、わがままな部分、みんなが自分に向いていないということをきかない。一匹狼で生きてきた子どもが多い。豊かな自然の中でゆっくりと子どもたちの心を開発していく。

麻薬、非行、家庭崩壊で小学校に通えていない。ここにいる間に知識を身につけてほしい。彼ら自身が知識を身につけたいという気持ちがなければならない。

新しい人生のための仕事、職業に就くための試験や技術の向上するためにはコンテストに出場してよい成績を収めなければならない。実用的な技術を身につけていくことが大切である。

また「6つの誓い」は「1. ここで定められている規則を守ります。」「2. ここで生活させて下さっている寄付をして下さる方に、感謝の気持ちを忘れません。」「3. 自分を高めていくために、常に忍耐強くしていきます。」「4. 私たちの人生に不可能という言葉はありません。」「5. 麻薬には一切手を出しません。」「6. 私たちは仏教徒として、仏教の教えに従って生きていきます。」となっている。校長によると、「訪問客は支援をして下さる人という認識が子どもたちにもあるので、子どもたちは心から感謝をこめて接待するという気持ちがある。」ということであった。実際に私たち訪問客や教職員の食事の配膳などは子どもたちが行っていた。また訪問客が暑さに参っているときにはペットボトルに入った水や冷えたタオルを持ってきてくれたりと、様子をよく見ていられる場面もあった。

4.2 生活の様子

生き直しの学校は「家」の代わりをする施設であり、小学生から高校生の子どもたちが共同

生活を行っている。平日は近隣にある公立の小・中・高校に通学している。高校卒業後は生き直しの学校を離れることもあるが、生き直しの学校からカンチャナブリー県内の大学へ通学することも可能である。一日のスケジュールは次の通りである。

表 2：生き直しの学校一日のスケジュール

	平日		休日
5:30	起床, 身支度	7:00	起床, 掃除, 朝食準備
6:00	エクササイズ (音楽に合わせて運動), 掃除, 農園水やり, 配膳	8:15 すぎ	朝食
7:00	朝食	9:00	学年別に作業 農作業, イベント準備(団子作り等)
7:30~	近隣の小・中・高校へ登校 (財団職員運転の車で送迎)		
16:00 頃	下校・帰宅・自由時間	12:00	昼食, 自由時間, 作業の続き
18:00	夕食	18:00	夕食
	小中高の縦割りでのグループ対抗で ゲーム, ダンスの練習等		小中高の縦割りでのグループ対抗で ゲーム, ダンスの練習等
21:00	学習時間又は就寝	21:00	学習時間又は就寝

出典：参与観察と聞き取り調査より筆者作成

平日の朝は、5:30 から始まる。身支度の後は音楽に合わせてエクササイズ(体操)が行われ、体力作りも行われている。朝食の後は近隣の小・中・高校に通学する。各学校の出発時間になると、担当の先生の前に整列し、点呼をして乗車する。車はワゴン車で、財団職員の運転手がピストン輸送で運転している。



写真 2：登校風景

4.3 アブラヤシ農園

生き直しの学校の敷地には、「アブラヤシ農園」が併設されている。この農園は2003年に財団の25周年記念事業として、生き直しの学校の運営を少しでも自立化させるという目標のもとに作られた。この事業のために日本をはじめとする支援者から、アブラヤシ4840本分募金が集まり、新たに購入した200ライ（1ライは約1.6ヘクタール）の農地に、約1760本のアブラヤシの苗木を植えるところからはじまった。アブラヤシの植林は年々数が増え、2008年には8500本を超えるまでになった。アブラヤシの苗木への直射日光を防ぐために、バナナの木も植林も行われている。バナナは食用として使われる他、木の葉、野菜くず、もみ殻、糠、廃物等と混ぜ合わせた中にEM菌（有用微生物群）を入れて、肥料としても使われている。アブラヤシの果実は石鹼や食用植物油として使われるが、今後はバイオディーゼル燃料として収益も期待されている¹⁾。

アブラヤシ農園は当初、生き直しの学校の運営の自立化という目的で始められたが、現在は子どもたちの職業訓練の場としても活用されている。これからの農園の運営に関して、校長は次のように話している。

現在は作業員を雇用しているが、ゆくゆくは生き直しの学校の卒業生を雇用していきたいと考えている。学校には知的能力の発達に遅れのある子どももおり、そのような子どもは社会に出ても仕事に就くことが難しいので、農園で雇用することも考えている。

子どもたちは放課後の空き時間や週末になると、アブラヤシ農園に行ったり、肥料作りの手伝いをしている。筆者の滞在中、週末の午前中に小学生の子どもたちと農園に実を拾いに行くことあったが、実を拾うこともゲームのようにして楽しみ、作業に飽きたら遊び場としても利用されていた。乾燥して荒廃していた土地がアブラヤシ農園になったことにより、生き直しの学校の住環境は良くなっているといえる。バンコクのクロントーイ・スラムの迷路のように入り組んだ住環境に比べると、このような自然の中で安全に暮らすことができるということは、子どもたちの成長にとって重要なことだと考えられる。

4.4 職員対象のアンケート調査から

11人の調査回答者のうち、先生が3名、事務・マネージメント・家政婦が1名ずつ、アブラヤシ農園のリーダーが1名、農園の作業員が3名、運転手が1名だった。下記の表が回答者の属性を一覧にしたものである。

表 3：生き直し学校のスタッフの属性

	年齢	性別	出身地*1	最終学歴	財団勤務年数	仕事内容
A	47	女	ターク(タイ北部)	専門学校	計 12 年	先生
B	43	女	チューンポー(南)	大学	計 9 年	先生(女子担当)
C	23	男	パッタニー(南)	大学	8 か月	先生(男子担当)
D	27	女	カンチャナブリー	大学	1 年 6 か月	事務
E	45	女	コーンケン(東北)	短大	19 年	マネージメント
F	33	女	ウードンタニー(東北)	小学校	3 年	家政婦
G	29	女	ナコンシータマラート(南)	大学	6 年	農園リーダー
H	35	女	ウーボンラーチャタニー(東北)	中学	6 年	農園
I	41	男	シーサケット(東北)	小学校	6 年	農園ワーカーのリーダー
J	38	男	カーラシン(東北)	小学校	3 年	農園, 飲み水管理
K	35	男	バンコク	高校	2 年	運転手, 修繕

*1 県名の後のカッコ内の方角は、タイ地図上の位置を表す。

出典：調査データに基づき筆者作成

4.4.1 財団と関わったきっかけ

財団と関わったきっかけは、大きく分けて3つあった。一つめは D, G の知り合いや友達からの紹介である。D は生き直しの学校で働き始めてからの心境の変化について次のように答えている。

最初知り合いから紹介された。そのあと働き出してこの仕事が好きになった。なぜなら人を助けたり、チャンスがない人にチャンスを与えることができるから。(D)

二つめは A, B, E のように、財団の趣旨に感動して働きはじめたケースである。A は 12 年間クロントーイの財団の幼稚園で教諭として勤めた後、他の教育施設で働き、その後財団に復職している。財団を離れていた間には、小学校での勤務経験もあった。生き直しの学校には 4 か月前に着任したばかりである。E は 19 年にわたり財団で勤務をしており、会計、人事、アブラヤシ農園の計画等を担当している。A, B, E はそれぞれ財団で働き始めたきっかけについて次のように回答している。

先生の仕事が好き。特に小さい子の面倒をみたり、教えたりすることが好き。他の仕事をしていたが、戻ってきた。(A)

財団の社会福祉や貧困の人を助ける、恵まれない子供を助けるという政策が好きだから。(B)

プラティープさん、ミンポンさんのしている仕事に感動して、彼女らのように仕事をしたいと思ったから。プラティープさんが恵まれない人や、貧困の人を助けているが、その

人たちから何ももらっていないことに感動した。(E)

三つめは生き直しの学校の卒業生 (C)、自分の子ども預けながら働いている (J) というケースである。C は生き直しの学校に入学したきっかけについて次のように語っている。

小さい時に自分の家族は貧乏で、母が亡くなったため、祖母にこの財団に連れてこられた。ここの卒業生で、財団から支援を受けた。(C)

C は高校卒業後、カンチャナブリー県内の大学に進学している。大学在学中もボランティアスタッフとして、年少者の世話をしてきたこともあり、年齢は一番下だが即戦力として活躍している。パン作り、タイ舞踊、ゲームの進行、ダンス等、オールマイティープレイヤーとして子どもたちをリードしていく姿は、年長者の財団スタッフからの評価も高いと伺える。

また J は子どもを預けながら働いていることに関して、「自分は貧乏だが、子どもには教育を受けさせたいので」と答えている。J は「子どもを預けながら」と答えているが、実際には敷地内に家を借り、そこで育てているという場合もある。2011 年の夏に訪れた際は、また別の職員の赤ん坊を、子どもたちが代わる代わる世話をしている場面も見られた。天井からゆりかごが吊るされ、その中で赤ん坊が揺られながら寝ていることもあった。

次に、「仕事を通して感じることはどのようなことか」という質問を行った。ちょうど筆者が滞在しているときは、日本人高校生のスタディツアー参加者が 9 名、韓国人、オーストラリア人の訪問客があったためか、回答の中には外国人訪問客との交流に関する楽しいが、コミュニケーションでは言葉の壁があるため難しく感じていると書かれているものが多くみられた。質問に対する回答には、次のようなものがあった。

訪問者と一緒に活動することが楽しい。外国人訪問者が訪問するときに、通訳するスタッフがいないときたいへん。(A)

いろいろな子供、外国人の訪問者に会えることが楽しい。いろいろな訪問者が来て、感動して帰ってもらえるかどうか、訪問者が来るときに子供がしっかり、言うとおりにするか。用意した食事を食べてもらえるかどうか。場所がきちんと用意されているかどうか。

(B)

訪問者と一緒に活動したり、案内することが楽しいが、外国人の訪問者とのコミュニケーションがとれない。(F)

日本人の団体が滞在する際は、財団の日本人スタッフが通訳兼コーディネーターとして同行している。生き直しの学校のスタッフで日本語で会話ができる人はいないが、簡単な英語は通

じることもある。生き直しの学校の訪問客には、毎年パン作りのワークショップをしている日本人や、石鹸作りやクラフト作りの指導をするベルギーの NGO が滞在することもある。出来上がったものはクロントーイの財団のショップで販売しており、財団の収入になっている。

4.4.2 生き直しの学校の教育の中で大切だと感じること

生き直しの学校のスタッフはここで行われている教育の中で、どのような点を大切だと感じているかについて質問した。回答は次の通りである。

彼らの家族の元へ戻れるようにする。自立できたら、家族と一緒に生活できる。子どもの発達のために、職業訓練、教育、生活が必要。(A)

専門的な面が重要、ござ作り、パン作り、ハーブ作り、農業、植物の世話 (D)

学校の中で学んだこと以外に、日常生活がどのようにできるか。自立するためには、チームワーク、がまん、思いやり、道徳、親孝行などが大切。(E)

日常生活に困らないように、幸せな生活を送るために、職業訓練や学校で学ぶことが必要。(F)

日常生活の中で、チームワークや忍耐、思いやり、道徳を学ぶことと、農作業、パン作り等の職業訓練から技術を身につけることが挙げられている。集団生活では感情のコントロールや他者との協調性を身につけ、職業訓練では専門的な技能を取得することで自立を促すことが大切とされている。中学3年生の女子生徒は、「看護師になって、両親が病気になったときに世話をしたい。」と語っていた。子どもたちがこの学校にきた背景を考えると、A が答えているように「自分が自立した生活ができれば、両親を含めた家族を養うことができる」ということが、ここでの生活の原動力になっているとも考えられる。ミンボン校長は親元を離れて暮らすことと、この学校の最終目標について次のように語っている。

スラムは環境が悪くても親と一緒に暮らせるが、小さいときに虐待されている子は、家には帰りたくない。身寄りがいないこともある。家に帰っても、親は麻薬漬けで学校には通えなくなる。そのため親と離れて暮らすことになっても、ここ（生き直しの学校）なら、勉強を続けることができる。

今いる子どもたち、彼らの能力に合った学力をつけてここを巣立っていくこと。

勉強が嫌いな子はケーキ作りやベーカリーなどプロになることを身に付ける。就業斡旋もする。

また、ミンボン校長は生き直しの学校を始めるきっかけになったできごとについて、次のよ

うに語っている。

「お母さん先生（ミンボン校長）は、幼稚園の時はとても無邪気で純粋だった子どもたちが、学校に通うようになって3～4年もすると、麻薬中毒になっていくのを見て、『いったい子どもたちに何が起こったのだろう』と思うようになりました。（中略）お母さん先生は、さまざまところから僧侶をお招きして、仏教に基づく道德普及の事業を、クロントイ70ライ地区で始めました。それは麻薬中毒者対象の更生キャンプのようなものでした。しかし、この事業は成果をあげることができませんでした。そこで、環境を変えることによってより良い事業ができるのではないかと考えたのですが、当初は誰もその考えに賛同しませんでした。」¹¹

麻薬中毒の背景には、家庭問題、経済問題、居住問題等のいろいろな問題が重なり合っているため、一筋縄ではいかない。これらの根本にある「政治が変わらなければ」という思いもあり、政治の変化を待つのではなく、目の前にいる子どもたちを一刻も早く救う方法として、環境を変えろという考えに至ったのではないかとも思われる。

現在、生き直しの学校にいる子どもたちの中には、「スラムに住んでいる友人が麻薬常習や密売で刑務所や鑑別所に送致されている。」と語っている者もいた。麻薬という誘惑に負けることのない強い心、ミンボン校長が繰り返し唱えている「自分を信じる心」を育てることが生き直しの学校の教育の中心にあると感じた。

4.4.3 現在の課題

生き直しの学校の中で、現在課題と感じていることについて質問を行った。その結果、プロジェクトの予算の不足をあげる者（A, B, D, E, F, G, J, K）が多かった。そしてこの原因は世界的な不況の影響にあるということだった。ドゥアン・プラティープ財団は収入の半数を海外からの寄付に頼っているため、不況によって寄付の打ち切りがあるとその影響は大きい。大学進学に関しても、より専門性の高い大学に進学する場合や、海外留学を希望する場合は、会報でスポンサー（いわゆる「パトロン」）を国内外から募集するという方法をとっている。

また生き直しの学校に訪問する人々を見ていても、日本人をはじめヨーロッパ系の外国人が多い。タイ人の団体が訪問することは筆者の滞在中は一度もなく、会報やホームページでもそのような記述は見られない。タイには「タンブン」の習慣があり、社会的弱者への寄付行為や人助けが日常的に行われている。2003年度版のNGO名録によるとタイには600ほどのNGOがあり、他にも非法人の任意団体として活動する団体も少なくない。現在のNGOは単に活動分野が多様というだけでなく、政治活動関与への積極度、政治的立場という点でも多様になっている¹¹¹。ドゥアン・プラティープ財団はスラムで活動するNGOの草分け的な存在であり、創設者のプラティープ・ウンソンタム・秦は国会議員にもなったことから、非常に有名なNGOの一つであるといえる。タイを拠点に活動するジャーナリストの話によるとは次のように語っていた。

タイ国民の中には「自分が寄付をしなくても、誰かが寄付をしてくれるだろう。」とか、「大きな団体だからたくさんお金が集まっているだろう」と考える人も少なくはない。タイには小さな財団（認可されていないものも含めて）がたくさんあるので、そちらの方に寄付をする。

また日本人でも創設当初の財団を知る人は、現在は「生き直しの学校」のような施設を運営していることを話すと、たいてい「今はそんな活動もしているのか」と、驚いた反応を示す。財団の活動も多岐にわたっているために、予算の振り分けは難しい問題といえる。

予算不足の問題の他には、子どもを見て育てる専門家（カウンセラー・医師・社会福祉士）の不足をあげている者が多かった。回答は次の通りである。

不況で子どもの発展のための目的予算が少なくなっている。専門家の人材が足りない。精神的な医者（カウンセラー）、社会福祉士など。(A)

子どもの予算が足りない。子どもの専門家、先生が足りない。(B)

不況の影響により、プロジェクトの予算が少なくなる。なぜなら、訪問者が少なくなり、そのため子どもの活動があまり発達しない。子どもを面倒見る人材が足りない。(D)

不況などで、政府からの予算が少なくなった。子どもを見て育てる専門家が少ない。(E)

子どもたちの中には両親からの虐待、物乞いを強要されノルマが達成されないと折檻される、食べ物欲しさに万引きを繰り返す等といった経験をしてきている者が少なくない。子どもたちがここに入学した経緯は、クロントーイ・スラムの住民委員（民生委員）より各地区別の状況が持ち込まれ、財団スタッフと子どもとの面談を経て、親又は地区の長と契約書を交わすというケースと、警察署に保護されて、そこから財団へ連絡が入り引き取るというケースがある。いずれにしても幼少期の悲惨な体験がトラウマになり、その後の成長に影響を与えることは計り知れない。

日本でも阪神・淡路大震災以降 PTSD ということが取り上げられるようになり、大きな事件があった後は学校に臨床心理士が入り、カウンセリングを行う体制がとられている。また学校や児童養護施設でもカウンセラーが教師、保護者と協力して児童生徒らの問題に関わっていくことも増えてきている。

幼少期に悲惨な体験をしてきた生き直しの学校の子どもたちには、心理セラピー等の治療も必要とされるのではないかとと思われる。問題行動をとる子どもに対しても、その行動を起因するものが幼少期の体験とすると、教師たちもその行動に対処することができる。ただ、幼少期の体験をそばで見ている者がいないので、そのような体験をしてきたかは子どもたち自身の語りの中からしか知ることができない。そのような意味でも子どもの語りを聞く専門家が求めら

れていると考えられる。

5. おわりに

本稿ではバンコクのスラムや他の都市でストリート・チルドレンとして育ち虐待や非行、麻薬といった犯罪に関わった子どもたちを保護し、共同生活を行いながら更生をする施設について、社会的排除と包摂の面から考察した。かつて子どもたちは麻薬の取引の運び屋になったり、店の食べ物や物を万引きしたりと、犯罪に関わる生活をしてきた。またカンボジアの国境沿いの村から連れてこられて、物乞いを強要され、1日500バーツ稼げないと煙草の火を体に押し付けられるなど折檻されたという、悲惨な経験を持つ子どももいる^{iv}。罪を犯したならば刑務所や鑑別所に入り、更生するということもできる。しかし子どもたちの行為の背景には、家庭内関係が悪く、離婚問題、暴力、虐待を受けていたり、家族の収入を補うために路上での物売りなどで働いているうちに学校の授業についていけなくなってしまうたり、コミュニティからも厄介な子ども・若者連中として蔑視されてきていることがある。このような状況は子どもたち自身の内面的な要因から起こっているものではなく、彼らが身を置く環境要因から起こるものであると私は考えている。そのためこの環境から離れ、安全で衣食住に不安を感じることなく、学校に通える場所を提供することが、子どもたちの本来の成長ができると考えられる。

現在抱える課題に関しては、予算の不足と専門家による支援が挙げられた。タイはもはや途上国とはいえないほど、都市は発展している。そのため外国からの資金の打ち切りもあり、NGOは予算の確保に奔走している。ドゥアン・プラティープ財団も事業を拡大し、外国からの訪問客、支援団体を積極的に受け入れているように見える。プラティープ夫妻は毎年何回か、支援団体の招待で日本で講演会を開いている。生き直しの学校の宿泊施設、子どもたちの住居、図書館等の建物にも日本の支援団体の名前が掲げられており、その関係者の訪問も多い。スタディツアーで交流のある中学校・高校・大学、奨学金の支援を行うNPO、企業の社会貢献活動として、財団を支援している。プラティープは1990年代のタイ民主化運動でも関与し、2000年には国会議員にもなった活動家であり政治家である。2004年12月にタイ南部を襲ったスマトラ島沖地震の際も、すぐに現地へかけつけ被災者救援を行った。そしてその後もバンガー県を拠点に津波孤児の支援を行っている。このような大規模な活動がメディアで取り上げられる機会が増えたこともあり、日本で財団に積極的に支援している人々と、タイに住む私の知り合いのタイ人や日本人とでは財団に対して温度差が感じられた。

専門家による支援に関しては、特殊な環境で幼少期を過ごした子どもたちに対する心理面でのケアとスタッフの研修が必要だと感じられる。これまでは25年間にわたり積み重ねてきた経験で対応してきた部分もあるが、子どもたちの発達に関わることはカウンセラーのような専門家の助言を取り入れながら、指導に反映していくことが望ましい。

社会的排除にあった子どもたちを包摂する方法には、この生き直しの学校のようなインフォーマル教育の他にも NGO の運営するストリート・チルドレンのオープンハウスやシェルターという施設もある。しかしこのような施設では、衣類や食事の提供、けがの手当てなど「基本的ニーズ」の対応が中心となり、シェルターの入居も強制はせず子ども自身の判断を尊重するため再び非行に走ることも問題とされている。またストリートで活動する NGO の中で、「麻薬依存」「ストリートからの離脱」「安全な性 (HIV/AIDS)」に関しては、成果が上がらないとされているが、これらは環境を変えなければ解決は難しい。タイではノンフォーマル教育局が設置され、山岳民族や学校を中退した子どもを対象とした識字教育等のノンフォーマル教育の取り組みはされてきている。しかし生き直しの学校にいる子どもたちのように、幼少期に特殊な体験をして過酷な環境で育った子どもには、長期的に保護するプログラムが必要であると考えられる。このような面からもインフォーマル教育の取り組みは有効であると考えられる。子どもたちは家庭的な雰囲気の中で規律のある生活を行いながら、心身共に健康になっていく。これからもインフォーマル教育が社会的包摂としての役割を担っていくことが期待される。そして子どもたちを包摂できたといえるのは、卒業後に彼らが自立できるかにある。子どもたちは大学進学を念頭においているものも多い。卒業後も生き直しの学校のスタッフに電話で近況を報告したり、面会、里帰りなど子どもたちの「家」として、継続的な支援が必要になっていくと考えられる。

(きたざわ やすこ・人間システム科学専攻)

注

- i 『アブラヤシ農園づくり 中間報告書』2005 年 7 月
- ii 『過去の経験から、未来を拓く ドゥアン・プラティープ財団 30 年の歩み』p.118-121
- iii 『タイ事典』p.70 「NGO」
- iv 『財団機関誌 ほほえみ 第 80 号』2009 年 6 月 15 日発行

参考文献

- 岩田正美, 2008, 『社会的排除 参加の欠如・不確かな帰属』有斐閣
- 岩田正美・西澤晃彦編, 2005, 『貧困と社会的排除 福祉社会を蝕むもの』, ミネルヴァ書房
- 遠藤環, 2011, 『都市を生きる人々 ― バンコク・都市下層民のリスク対応』, 京都大学学術出版会
- 財団法人日本タイ協会, 2010 『タイ国情報』
- 櫻井義秀・道信良子編, 2010, 『現代タイにおける社会的排除 ― 教育, 医療, 社会参加の機会を求めて』梓出版社
- 櫻井義秀, 2005, 『東北タイの開発と文化再編』北海道大学図書刊行会
- 末広昭, 2009 『タイ中進国の模索』岩波新書

- 曹洞宗国際ボランティア会・編，1996，『アジア・共生・NGO』，明石書店
- ドゥアン・プラティーブ財団・編，2010，『過去の経験から，未来を拓く ドゥアン・プラティーブ財団 30 年の歩み』
- 独立行政法人国際協力機構（JICA），2004『課題別指針 ノンフォーマル教育』
- 独立行政法人国際協力機構（JICA），2005『ノンフォーマル教育支援の拡充に向けて』
- 新津晃一・秦辰也，1997『転機に立つタイー都市・農村・NGO から』風響社
- 秦辰也・プラティーブ・ウンソンタム・秦，1997『体験するアジアーボランティア夫婦の日本・タイ共生論』明石書店
- 秦辰也，2005，『タイ都市スラムの参加型まちづくり研究』，明石書店
- 日本タイ学会・編，2009『タイ事典』，めこん
- ドゥアン・プラティーブ財団・編，2005.7『アブラヤシ農園づくり 中間報告書』
- ドゥアン・プラティーブ財団・編，2009.6『財団機関誌 ほほえみ 第80号』